

がんの痛みと痛み止めについて No. 1

がんの痛みとは・・・

がんは、痛みを伴うことの多い病気であり、がん患者の70%以上が痛みを経験するといわれています。がんの痛みの原因はさまざまですが、主に次のようなものが挙げられます。

がんの痛みの原因

- ・ がんの周囲組織内への浸潤
- ・ がんによる神経の圧迫
- ・ 他の臓器や骨、脳への転移
- ・ 胃や腸等の閉塞 等



また、痛みのある状態が長く続くと、不眠、食欲不振、集中力低下等を引き起こし、日常生活の妨げとなります。このとき、痛みを取り除く治療を行うことは、がんを治すための治療と同じ、もしくはそれ以上に重要です。痛みを取り除くことにより、十分に眠ることができ、食欲も回復し、また、ものごとを考える余裕ができ、がんの治療にも前向きに取り組めます。さらに、体力に合わせて日々の仕事や家事をしながら、痛みのなかったときのような日常生活を送ることもできるようになります。

知っておいていただきたいこと

痛みの治療について

痛みがあるのに我慢されていませんか？痛みは、患者様本人にしかわからない症状であり、ご本人から教えていただくことでしかわかりません。どこが、どのように、どのくらい痛むのか、遠慮なくありのままを伝えていただくことが大切であり、これは、痛みの治療における患者様の役割でもあるのです。痛みの治療は、患者様と医療者側が十分にコミュニケーションをとりながら、協力して進めていく治療です。

《 痛みの表現の例 》

- ★ どこが痛むのか・・・胸が痛い。腰が痛い。左わき腹が痛い。下腹が痛い。等
- ★ どのように痛むのか・・・締めつけられる痛み。ずんと重い痛み。刺すような痛み。ピリピリした痛み。等
- ★ どのくらい痛むのか・・・眠れないくらい痛い。じっとしていられないくらい痛い。等
- ★ どんなとき痛むのか・・・常に痛い。体を動かすとき痛い。ごはんを食べるとき痛い。等

痛み止めのお薬について

()は商品名

まずは、これ

一般的な鎮痛薬 (非ステロイド性消炎鎮痛薬 等)

痛みが出てきたとき、まず最初に使用します。頭痛や歯痛等にも使われるお薬です。例) ジクロフェナクNa、ロキソプロフェン、アセトアミノフェン (カロナール) 等

それでも痛みが残っているときは

麻薬性鎮痛薬

がんによる痛みにも優れた効果を発揮します。麻薬ですが、医療用につくられたお薬であり、量と時間を守って使用すれば、依存症が起こることはありません。例) オキシドロン (オキシコンチン)、モルヒネ (MSコンチン)、フェンタニル (フェントス) 等

その他には・・・

鎮痛補助薬

上記のお薬では効きにくい痛みにも使用します。もともと鎮痛薬ではありませんが、痛みを取り除く効果もあります。

例) 抗けいれん薬、抗うつ薬、抗不整脈薬、ステロイド等

どの鎮痛薬を使うかは、病気の進行状況とは関係なく、痛みの原因や強さに応じて決めます。複数の種類のお薬を併用することもあります。

がんの痛み止めとして最もよく使用されている麻薬性鎮痛薬は、痛みが消えるのに必要な量の個人差が大きいため、どの患者様にも少量から使い始め、痛みが消えるまで量を増やしていきます。こうして得られた量が他の人の量と大きく違っていても、お薬の量が病気の進行状況を示すわけではないので、心配はありません。お薬の必要がなくなれば、徐々に減量していきます。

痛み止めのお薬

Q&A



Q 痛み止めは体に悪いような気がします。できるだけ使わない方がよいのではないですか？

A 痛みがあるのに、我慢して痛み止めを使わずにいると、不眠、食欲低下等のため体も弱ってしまいます。副作用の出るお薬もありますが、予防対策をすることで軽減できます。必要なお薬を、効果的に使用することが大切です。

Q 強い薬を使うと、もっと痛みが強くなったときに使う薬がなくなるのではないですか？

A 痛みが強くなったら、さらに痛み止めを増やすことで痛みを取り除くことができます。薬を増やしても痛みが取れないときには、お薬の変更や鎮痛補助薬の使用、もしくは、放射線療法、神経ブロック療法等から、痛みの種類に合わせた方法を選択します。

Q 麻薬性鎮痛薬を使用すると、中毒になってやめられなくなるということはないですか？

A 痛みのある患者様が正しい用法、用量で使用する場合、依存症が起こることはありません。ですから、お薬は必ず医師の指示通りに使用してください。必要がなくなった場合は、徐々に減量していけば安全に中止することができます。